慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	A・C・ピグー著 アルフレッド・マーシャルと現代思想
Sub Title	
Author	山部, 徳雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.7 (1954. 7) ,p.765(63)- 766(64)
JaLC DOI	10.14991/001.19540701-0063
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540701-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

おける $I_{t+\theta}$ は $I_{t,\sigma}$ よりも小となる。下降過程では $\frac{\alpha}{1+c}I_t < I_t$ で且つ $\mu\frac{\Delta I_{t-\omega}}{\Delta t} < 0$ であるから $I_{t+\theta}$ は I_t よりも小さくなる。かくして好況はそれを裏返しにした形の不況を伴ふ。これが自律的な景氣循環である。しかし時と共に μ が増大し他のパラメーターが不變なる場合も考へられる。この場合には爆發的な好況過程の進行も考へられる。

$$I_{t+\theta}=\frac{\alpha}{1+c}I_t+\mu\frac{\Delta I_{t-\omega}}{\Delta t}+\varepsilon \quad \cdots\cdots\cdots\cdots(13)$$

とおき ε を random disturbance とすればこのショックによつて半規則的な循環運動が起る。これを現實に當嵌めて説明するには重大な困難があるが、實測の示すところでは減衰效果は弱くなく、それから生ずる循環運動は不規則である。

カレツキーはこの説明をなすに當り前述のアメリカの資料から導出したIに關する計測式

$$I_t=0.734I_{t-\frac{1}{2}}+0.634I_{t-1}+0.489I_{t-\frac{3}{2}}-0.245I_{t-\frac{5}{2}}+\varepsilon$$

から出發する。random shock が與へられたときのIの運動法則を研究するため、Tippet の Random sampling Numbers から拔萃された0から9までの範圍の一六〇個の random digits が使用される。その結果は次表の如くである。

t	ε_t	I_t
0	−2.5	−2.5
1	+4.5	+4.5
2	+0.5	+0.5
3	−2.5	−2.5
4	−0.5	−0.5
5	−3.5	−5.1
6	+1.5	−2.4
7	+2.5	−2.3
8	−2.5	−2.6
9	∓2.5	−0.4
10	−1.5	−0.5

$\varepsilon_0-\varepsilon_4$ は I_t の initial value と一致し、第五期において前述の方程式による I_0 から I_4 までの I_5 に及ぼす效果が結合して現はれ ε_t の效果がそれに加はる。この結果を見ると平均八ケ年のかなり規則的な循環が現はれる。しかしカレツキーはこの様な模型は一般型ではなく、減衰效果がもつと強い場合の方が一般的であるとする。

第六編では傾向と發展の關連が述べられる。

$$L_t=\mu\frac{\Delta A}{\Delta t}+\frac{e}{1-\alpha}\frac{\Delta B}{\Delta t}$$

とおけば、

$$I_{t+\theta}=\frac{\alpha}{1+c}I_t+\mu\frac{\Delta I_{t-\omega}}{\Delta t}+L_t+d_t$$

とおくことができる。この中で (L_t+d_t) なる項は投資の長期變動を表はすものと考へられる。この項を除去したとき前述の

$$I_{t+\theta}=\frac{\alpha}{1+c}I_t+\mu\frac{\Delta I_{t-\theta}}{\Delta t}$$

なる循環方程式が得られる。I_t の中の長期變動を示す要因を y_t 循環運動を示す要因を i_t で示せば、定義により $I_t=y_t+i_t$ であり、y は L_t+d_t なる長期變化に制約される。Lは y の變化率に比例して變化する。Aは短期においては常數であるが、長期をとつて見ると變數と考ふべきであり、$P_t=\frac{1}{1-q}(I_{t-\omega}+A_t)$ とおくべきでこのことから $L_t=\sigma\frac{\Delta y_{t-\omega}}{\Delta t}$ を得、

$$y_{t+\theta}=\frac{\alpha}{1+c}y_t+(\mu+\sigma)\frac{\Delta y_{t-\omega}}{\Delta t}+d'_t \quad \cdots\cdots(14)$$

となる。$\frac{\alpha}{1+c}=n<1$ であり、この式が靜態均衡にあるための條件は、$y_{t+\theta}=y_t=\delta$ にして $\frac{\Delta y_{t-\omega}}{\Delta t}=0$ なることである。但し δ は減價償却である。そうすれば $d'=(1-n)\delta$ となり減價償却の比率を β で示すならば $d'=(1-n)\beta K$ であり、innovation によつて靜態均衡の水準が引上げられることを考へると $d'_t=(1-n)\beta K_t+rK_t$, $y_{t+\theta}=(\beta+r)K_t$ となる。これは長期投資が減價償却を越える事實を示す。これから投資の變化率を求めると

$$\frac{y_{t+\theta}}{y_t}=n+\frac{m}{y}\frac{\Delta y_{t-\omega}}{\Delta t}+(1-n)\beta\frac{K_t}{y_t}+\gamma\frac{K_t}{y_t} \quad \cdots\cdots(15)$$

となり、$\frac{K_t}{y_t}=\frac{1}{\beta+v}$ とおけば v は K に比例して變化するから $\frac{1}{y_t}\frac{\Delta y_t}{\Delta t}=v$ となり、結局 $\frac{y_{t+\theta}}{y_t}=1+\theta v$ となる。又この式が成立つためには、$1+\theta v=n+mv+\frac{(1-n)\beta+\gamma}{\beta+v}$ なる條件を要し、これより y の變化率が正負の何れの方向に向ふかゞ判定される。

×

以上が本書の大要で前著 Economic Fluctuations における思想を發展させたものと云つて良い。しかしその分析は Steindl, Maturity and Stagnation in American Capitalism, Oxford, 1953 と相通ずる點が少くないと思はれるが、内容は必らずしも一義的に首肯できない點も少なくない。殊に第五編の random shock の效果に關する取扱ひ等は牽强附會とも思はれる説明をしてゐるが、もはや豫定の紙數も盡きたので批判については他日を期することとし、今回は内容紹介を以て一應擱筆することとしたい。

(M. Kalecki, Theory of Dynamics, an essay on cyclical and long-run changes in capitalist, economy London, 1954. pp. VI+178)　(鈴木　諒一)

書評及び紹介

A・C・ピグー著「アルフレッド・マーシャルと現代思想」

この書物を開くに當つて、人々が、マーシャルの時代的背景とその人間性を知りその中から經濟的現實を解明する目論見を引出そうと考えるならば、失望するであろう。この著書におけるマーシャル、それは端的にいえば、ピグー化されたマーシャルである。諸種の學説の中にあつて、古典派の代表者であるピグーが、當面する問題をマーシャルの述べたこと又はマーシャルであつたならばこう述べたであろうと想定することによつて、解説しようとした。第一章の第一節と第二節において、數學的方法と統計學がとりあげられる。數學的教養の深いマーシャルの分析が、高度の計量可能性と明確性をもつていたことは、周知のことである。しかし彼は餘り數學を用いなかつた。これ等の節で、マーシャルの數學や統計的事實に對する態度が示される。第三節と第四節では、彈力性の概念と利子率の問題が檢討される。彈力性の概念は、ピグーの理論的分析において重要な位置を占めていた。こゝでは、需要の彈力性について、需要曲線の形並びにその曲線上における價格の點と彈力性との關係が、數字を以て説明される。しかし、需要曲線にとつての現今の課題は、貨幣の購買力、貨幣所得との關係更には寡占市場における曲線の形態である。利子率については、ケインズの $M=L(Y_w, i)$; $S_w(Y_w, i)=I_w(Y_w, i)$ とマーシャルの $I(i)=S(i)$ との比較がなされる。ピグーは、マーシャルも Y_w（雇傭量）の變動に留意していたことを强調する。即ちマーシャルの方程式は長期的觀點に立つものであり、長期的にみるならば當

時の雇傭率（或いは勞働者の就業率）は大體一定であつたとのべる。しかし我々は、マーシャルが、ピグーがのべる如く雇傭量の變化を考慮していたとは、思われない。尙こゝでピグーが、その著「ケインズの一般理論」で、現金殘高式の $n=pk$ から、「マーシャルの流動函數」$M=L(i,k)$ を想定したことを思い出す。第五章では、效用の問題が取扱われる。厚生經濟學の立場から效用の比較計量の可否が探究される。功利主義的厚生經濟學は、個人間の效用の比較計量の可能性を主張する。最近ではアームストロング、ケネディによつて究明されようとした。こゝにおけるピグーの論證は、やゝ明確を缺く。マーシャルの消費者餘剩の分析から計量可能性をとく。しかし他方マーシャルも述べている如く個人の效用は、貨幣額と同時に、個人の心理狀態と重要な關係がある。こゝから平均人を取出してそれと相對的比較の中に個人間の效用を計量しようとする。否計量が可能だととかれている。貨幣所得と個人的心理からなる相對的實質所得の分析的試みはなされていない。更に個人の效用と社會的厚生の關係が重要なものとなつてくる。しかし社會的價値判斷については、こゝではのべられていない。第六節は、社會主義について。マーシャルが現在生存していたならば、どのように考えたろうか。マーシャルの社會主義についての見解は、彼の論文「經濟的騎士道の社會的可能性」の中心がうかゞわれる。ピグーは、英國の現狀を説明するに、マーシャルの如上の論文から引用したり想定したりするわけである。ピグーは、社會主義政策の遂行による資本蓄積への重壓、經濟的エネルギーの不活潑を指摘する。もつとも一部の企業（例えば郵便、鐵道等）の國家規整による優秀性は認める。しかしこゝで我々が注意しなければならないのは、先にのべたマーシャルの論文である。彼はこの中で企業の大規模化、ビューロクラシーへの傾向を見拔くと共に、それらの企業に働く人々が、金錢それ自體よりも成攻と名譽を重ずることをのべている。そして更に健全な企業家精神として社會的道義心を要求している。利潤動機のみが、經濟的エネルギーの源泉の凡てではない。

以上本著の各節について簡單にのべてきた。マーシャルの理論は、既に教科書的に單純化され、因襲化されている。今日マーシャルをして生存せしめたならば、どのような見解をもつであろうか。我々が、ピグーに望むところのものは、所謂「眞のマーシャル」「偉大な經濟學者マーシャル」その人を畫いてくれることではなかつたろうか。

(A. C. Pigou; Alfred Marshall & Current Thought, 1958. pp. 85)

（山部　德雄）

安平哲二「社會主義經濟理論の展開」

東京都立大學教授安平哲二氏の新著は、社會主義經濟體制下における經濟計算論の諸問題を正面からとりあげ、かつソヴェートにおける多數の學者のこの方面に關する研究文獻をたんねんに追跡している點において注目すべき力作と思われる。

周知の如く、生產手段の所有と處分が國家の獨占的支配下にある經濟體制の下において、資源の合理的配分を（場所的ならびに時間的に）規定する規準は何であるかということは、現代の經濟理論上の一つの興味ある問題であつた。それは社會主義經濟が合理的に可能であるかどうかという純理論的な興味に加えて、ソヴェート經濟の現實に對する解釋と批判或いはまた資本主義對社會主義という兩體制の經濟的能率の比較という政治的興味が重なつて、實踐的にもなんらかの實りを期待される問題なのである。

著者は第一編において自由制社會主義の經濟計算論を紹介し、これに對するイギリスの準マルクス的經濟學者ドッグの經濟計算論と對比させる。著者の指摘する通り、ドッグの立場はソヴェート的な經濟體制を元にした經濟計算論であつて、前者すなわちランゲ流の經濟計算論の純理論的性格に比較して、一そう現實的具體性がある。その最も顯著の特長の一つはランゲ流の消費者優先の原理を否定して投資の政治的計畫化を承認し、それによつて市場經濟にみられる景氣變動や市場均衡の一般的不安定性、利子率と利潤率による制約を超える國民經濟の運營の可能性を指摘していることであろう。

しかしながら、それならば投資の計畫化の根據は何であるか。利子率と利潤率の制約を超える經濟計算の合理性は何であるか。この答えは容易にドッグから引出すことができない。政治的なプライオリティ・リストといだけでは答えにならない、少なくとも經濟技術的に資源配分の選擇を決定する基準が與えられなければならないからである。

この問題は今日のソヴェートの政治家と經濟學者とを惱ましている。現在のソ連の體制下においては市場的に成立する利潤率はないし、利子は殆ど全く無視されている。年々の政府の建設投資は無償還、無利子の原則で個々の產業と企業に分與される慣行である。したがつて用途の選擇に必要な全體的費用比較（代替的用途の意味の費用）を缺いている。このような缺陷はたとえば、ソ連政府の五ケ年計畫における重工業建設や個々の企業建設における資本の浪費に端的に現われていると察せられる。もとより資本財生產の重視はこの國の政府の意圖に出ずるものには相違ないが、一應それを受けいれるとしても、技術的な意味の費用計算の障碍は計畫を恣意的にし、したがつて浪費と節約の基準を曖昧にしてしまうのである。ソ連の經濟學者が投資の選擇においていかにしてその效率を測定するかに苦心するのもけだし當然であろう。

この書において著者が最も力を入れた部分もこの問題にあると思われる。第二編は前半においてソヴェート學界における價値、貨幣および價格の理論に關する一般的傾向を概說し、後半において資本效率の測定と投資選擇に關する現下の學說を紹介している。著者の俎上にのせられた學者はストルーミリン、ムスティスラウスキー、チェルノモルジクをはじめとしてなお幾人かの學者の名をあげることができる。これらの學者の一つ一つの特長をここに紹介する餘地はないが、そのいずれもが現在ソ連の慣行となつている固定資本回收期間比較による判定の方法に不滿をもちながら勞働費用の概念の中に一方において勞働價値を計算單位としながら他方において資本の時間的要素をとりいれなくてはならないこと、資本の減價と銷却の費用を考慮すべきこと、他の用途への轉用の效用を考慮すべきことを說いているのは興味がある。しかし、注意を國民經濟全體の立場から眺めれば、このような技術的計算は資本の總供給量と投資機會の關係より生ずる投資の基準に少しも貢獻し得ないため、極めて限られた妥當性しかもち得ないものであることは明かである。いずれにしても、ソ連學者の提案は現在の段階においては實際に行われている五ケ年計畫や年次計畫の作成において有用な貢獻をなしているとはいい難い狀態にある。

著者はこれらの多數の學者の見解とそれに對する外國の學者ベレトーム、ドッグ、キャプラン等の批判的見解を忠實に紹介することに努力を拂い、著者自身の見解を述べることをむしろ差控えている。筆者の讀後感を一言附加えるならば、投資效率の問題においても、價値と價格に關するこの國の理論と同じよ